

追悼文 牧衷さんありがとう

長野県 渡辺規夫

牧衷さんが10月13日に亡くなりました。

牧さんは、岩波映画製作所でシナリオライター、プロデューサー、取締役として、科学教育映画体系や、楽しい科学シリーズの多くのすばらしい科学映画を作ってきました。また、仮説実験授業研究会の最初期からの会員でした。

牧衷さんの名前は仮説実験授業研究会会員の中でそれほど知られていないように思います。そこで、牧さんと仮説実験授業の関係を書くことで追悼文としたいと思います。

学生運動と仮説実験的認識論

牧さんと板倉さんは1950年前後の学生運動の仲間でした。学生運動を通じて板倉さんや牧さんが身につけた考え方は仮説実験的認識論でした。

それまでの学生運動(に限らず当時の運動)の方針は身近なものから始めて、次第に一般的なことに移行させていこうとするものでした。しかし、そのやり方では必ず押しつけが生じます。というのは、身近な課題で意見が一致したとしても、一般的な問題でも意見が一致するとは限らないからです。当時の学生運動では「授業料値上げ反対」というスローガンですべての学生を結集できました。しかし、その余勢を駆って「政府の再軍備反対」という方向に持っていこうとしたたどたん多数の学生からそっぽを向かれてしまいました。「授業料値上げ反対」という特殊な課題から、「政府の方針に反対」という一般的な課題に移行させようとするには無理があったのです。

一般から特殊へ

当時の学生運動指導部は方針の提起のしかたを「一般から特殊へ」とすることにしました。まず「政府の再軍備の方針に反対する」という一般的な方針を提起し、討論し、多数派を結成することに成功しました。このような一般的な問題について多数派を形成すると、「大学の授業料値上げ」という特殊問題は(授業料値上げは再軍備のための予算確保のためであるから)反対することはどの学生にとっても当然のことになったのです。

牧さんは言います。

「数教協の銀林浩さんは、この「一般から特殊へ」を水道方式という形で結実させた。板倉さんは仮説実験授業という形で結実させた。」

多くの理科教育ではやさしい問題から次第に難しい問題に進むという構造になっています。この教え方では必然的に押しつけが発生します。これは多くの運動で身近な問題から始めて次第に一般的な問題に移行しようとして押しつけが発生していることと同じです。仮説実験授業の授業書《ものとその重さ》では「体重計の上で踏ん張ったりすると体重が変わるかどうか」という難しい問題から始まります。「粘土の形を変えたら重さはどうなるか」というより単純な問題は体重の問題の後に出てきます。授業書は「一般から特殊へ」という方針で作られているのです。

授業は運動の一種

牧さんは「2人以上の人間が共通の目標を持ってやることはみな運動である」と言っています。授業も「子どもと先生がみんなで賢くなるという目的を持って進めている運動」なのです。実は授業書は授業という運動の運動方針なのです。授業書で授業をするとうまく行くのは、授業書という運動方針がうまくできているからなのです。

牧さんの考えを学ぶと仮説実験授業を少し違った角度から深く理解できるようになります。私は、そのことに気がついて、牧衷さんの話を聞き、録音し、ガリ本にするという仕事をしてきました。（上田仮説出版の出版物）現在出版された量の数倍の録音が残されていて、順次起こして本にしていくことを計画しています。

革命的改良主義と戦後精神

牧さんの考えの要点は「革命的改良主義」と「戦後精神」ということができます。実はそれは牧さんの考えであるのみならず、仮説実験授業そのものの精神です。仮説実験授業はきわめて革命的な理論です。しかし、その普及のさせ方は改良主義的です。「戦後精神」とは牧さんの造語ですが、「自分の頭で考え、自分の足で立つ」という戦後精神があったからこそ仮説実験授業は生まれたというのが牧衷さんの主張でした。

牧さんから何を学びどう発展させるか

牧さんは問題を歴史的に考えるという視点を教えてくれました。話を聞くたびに目を開かされる思いをしています。今年の8月に山形で開かれた会で、牧さんは、「日本と中国の尖閣諸島を巡って争っている問題は、今年の秋までに解決する。」と予言しました。今、牧さんの予想どおりの結果になっています。この予想のもとには物事を歴史的に見るということです。

仮説実験授業では問題の説明の時に、どのような条件でどのような実験をするのか、予想が正しいかどうかをどう判定するかをはっきりさせなければなりません。牧さんによれば、社会的な運動のときにも、何をしたらいいかを具体的にはっきり提示しなければいけないと言います。方針を聞いたときに「私は何をやればいいのか」ということがわかるような訴えでなければならないと言うのです。

「日中の尖閣諸島の紛争について、『尖閣諸島は日本の領土である。』と教科書に書くことになった。そこでわれわれは何をすればいいか」という問題に対して牧衷さんの提案は、「中国政府はそのことについてどう言っているのかを調べ、中学生・高校生にもわかるような資料を作る。」というものでした。授業で「中国がどう言っているかを教えていけない。」ということはないので、そういう日本と中国の両方の政府の言い分を生徒に教えて考えさせるという授業はその気になればすぐにもできるというのです。

日中問題については田中角栄の日中国交回復のときの手法、尖閣諸島問題は棚上げするという以外に外交的に解決策はないというのが牧衷さんの意見でした。これも外交の歴史を調べればそれ以外にないことは明らかだというのです。

フランスでのテロをどう考えるか

牧さんは『たのしい授業』4月号に書かれた板倉さんの「テロといじめと教育」という文章には異論があるということでした。このことについて板倉さんとも話し、少人数の会でもフランスでのテロについてどう考えるかについて話してくれました。その考えを『たのしい授業』の読者に向けて書きたいと言っていたのですが、その原稿を書き上げることなく亡くなり、さぞ無念だっただろうと思います。草稿や講演の録音は残されていますので、編集の上、公表できるようにしたいと思います。

11月13日にフランスで再びテロがありました。牧衷さんにこのテロをどう考えるかを聞きたいとも思いますが、それももうできません。これまで教えてもらったことをもとに、自分の頭で判断することができるようになりたいと思います。

牧さんは「仮説実験授業研究会の会員は会以外のところで自分たちの研究を発表していく必要がある」ということを繰り返し力説していました。心したいと思います。

牧家は無宗教ということですが、「冥福をお祈りします」という言葉は似合いません。牧さんの考えは私たちの中に生きています。それこそが牧さんの望んでいたことなのではないでしょうか。